

指導活用技術

分類名〔病害虫〕

指11	高密度播種におけるいもち病防除法の比較
-----	---------------------

宮城県古川農業試験場

## 要約

高密度播種において播種量に関わらず育苗箱施用剤を50g箱施用する場合、葉いもちの抑制効果が不十分であり、育苗箱施用剤の側条施用が安定した効果を示す。

普及対象：高密度播種を導入する土地利用型経営体  
普及想定地域：県内全域

## 1 取り上げた理由

「普及に移す技術」第94号で高密度播種における初期病害虫防除法について報告したが、種子塗沫剤や播種量が異なった場合の評価を行ったため、指導活用技術とする。

## 2 指導活用技術

- (1) 高密度播種において、乾粃250g、300g播種し育苗箱施用剤を50g箱施用した際の葉いもちに対する防除効果は、標準量播種（160g）に50g箱施用したものに比べ、明らかに葉いもちの抑制効果は劣り、播種量（250g、300g）との間で効果の差は見らない（図1、表1）。
- (2) 高密度播種において、育苗箱施用剤を側条施用した際の葉いもちに対する効果は、播種量に関わらず高密度播種で50g箱施用したものに比べ抑制効果は勝る（図1、表1）。
- (3) 高密度播種において、種子塗沫剤を処理した粃を300g播種した場合、乾粃300g播種で50g箱施用したものと同等の効果で、育苗箱施用剤を側条施用したものに比べ効果は劣る。（図1、表1）

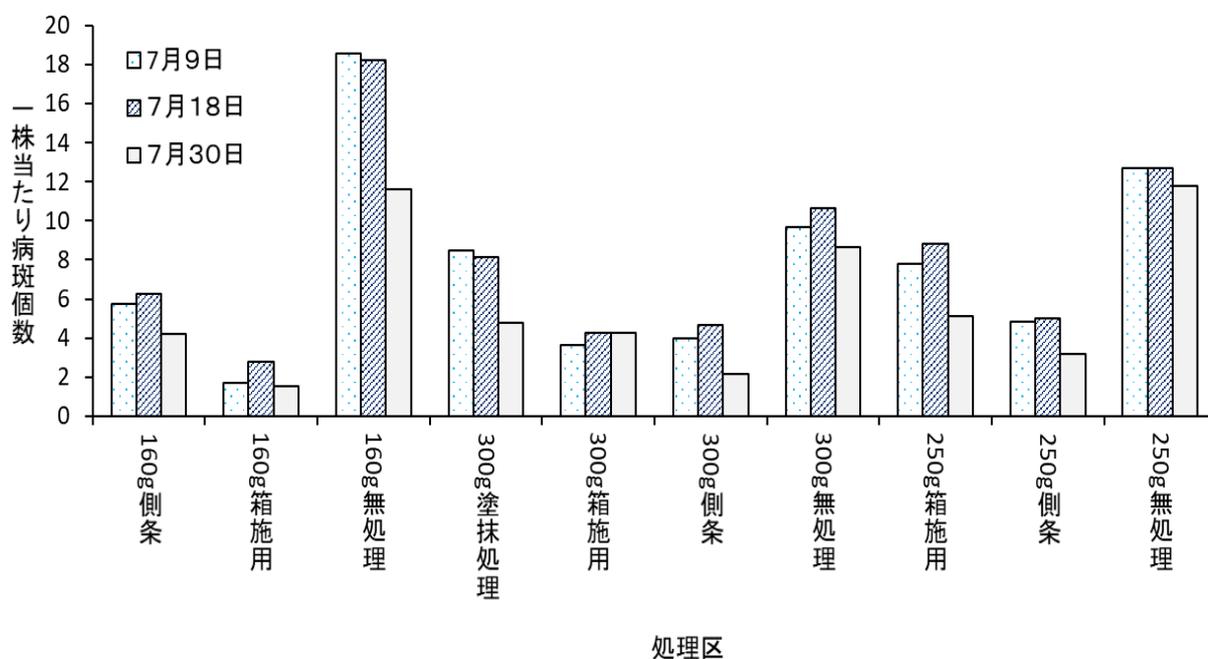


図1 育苗箱施用剤の処理方法の違いによる一株当たりいもち病斑個数

### 3 利活用の留意点

- (1) 試験は令和元年5月から9月にかけて「ひとめぼれ」を用い古川農試内ほ場で行った。高密度播種は乾粳250g（催芽粳300g）及び乾粳300g（催芽粳360g）を4月26日に、標準量播種は乾粳160g（催芽粳190g）を4月19日に播種した。いもち剤は高密度播種の箱施用剤、側条施用剤ともクロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤（「Dr. オリゼフェルテラ粒剤」）を使用し、標準量播種は同一系統剤である「Dr. オリゼリディア箱粒剤」を使用した。種子塗抹剤はイソチアニル水和剤（ルーチンシードFS）を乾燥種もみ1kgあたり原液8mlを浸種前に塗抹処理した。箱施用剤は移植当日（5月17日）に規定量（50g/箱）散布し、側条施用も移植当日（5月17日）に側条施薬機を用い規定量（1kg/10a）を目標に散布した。栽植密度は73株/坪として移植した。
- (2) いもち病の発生には6月19日に伝染源として試験区内に2箇所、いもち病にり病した苗を設置し発病を促進させた。
- (3) 葉いもちの初発は7月1日で、初発以降下位葉で病斑が進展したが、7月中旬から下旬にかけて低温となり、病斑の進展は緩慢となり少発生の条件下で行われた試験である。

（問い合わせ先：宮城県古川農業試験場作物環境部 電話0229-26-5107）

### 4 背景となった主要な試験研究の概要

- (1) 研究課題名及び研究期間  
新農薬による病害虫防除に関する試験（単年）
- (2) 参考データ

表-1

試験区名	播種量	薬剤施用量及び方法
160g側条	乾粳160g	1kg/10a移植同時側条施用
160g箱施用	乾粳160g	50g/箱移植当日施用
160g無処理	乾粳160g	薬剤施用なし
300g塗抹処理	乾粳300g	乾粳1kg当たり8ml塗抹処理
300g箱施用	乾粳300g	50g/箱移植当日施用
300g側条	乾粳300g	1kg/10a移植同時側条施用
300g無処理	乾粳300g	薬剤施用なし
250g箱施用	乾粳250g	50g/箱移植当日施用
250g側条	乾粳250g	1kg/10a移植同時側条施用
250g無処理	乾粳250g	薬剤施用なし

- (3) 発表論文等
- イ 関連する普及に移す技術  
水稻の高密度播種苗における初期害虫と初期いもち病防除法の比較（第94号参考資料）
- ロ その他  
なし
- (4) 共同研究機関  
なし